

✠020 パウロ書簡

パウロ書簡には、『ローマの信徒への手紙』『コリントの信徒への手紙一』『コリントの信徒への手紙二』『ガラテヤの信徒への手紙』『フィリピの信徒への手紙』『テサロニケの信徒への手紙一』『フィレモンへの手紙』がある。

『コロサイの信徒への手紙』、『テサロニケの信徒への手紙二』は、パウロの真正書簡であるかは議論がある。

『エフェソの信徒への手紙』および『テモテへの手紙一』、『テモテへの手紙二』、『テトスへの手紙』は、パウロを擬して、パウロの死後書かれたとする見方が一般的である。

『ヘブライ人への手紙』は、近代までパウロによるものとされていたが、匿名の手紙であり、後代の筆者によるものとする見方が支持されている。

参考：書簡名に下線がある7つの書簡は、パウロが書いたものとされる。書かれた年代については諸説がある。以下同じ。

●ガラテヤの信徒への手紙（AD48～49 頃）

パウロは小アジアの中部、ガラテヤ（小アジア中部のローマ帝国での呼称）という地域のパウロ自身が創設したキリスト教徒の共同体にあててこの手紙を書いている。本書は異邦人のキリスト教徒がユダヤ教の律法をどう考えればいいのかという問題を扱っており、この問題は初代教会では重要な問題であった。エルサレムに向かう途上で（AD48年の「エルサレム会議」の〈直前あるいは〉直後に）書かれたもので、ガラテヤ一帯の諸教会にあてて書き送ったものと思われる。この共同体はパウロが離れた後で、「異なる福音」を伝えるものたち（偽教師）が現れ、信徒の間に混乱をひきおこしていたことがうかがえる（教会員の中には、ユダヤ教の律法に固執して福音を捨てる者がいた）。パウロはこのような教えに耳を貸さないようガラテヤの共同体のメンバーたちに強く求めている。この手紙の中でパウロは、モーセの律法の目的と、霊的な教えの大切さを説明した。

本書簡の中心テーマは異教徒の改宗に関わる問題である。これは本書簡がまだほとんどのキリスト教徒がユダヤ教の出身だったキリスト教の最初期にかかれたことを示し、パウロの存命中にかかれたことも示す。本書に描かれる教会共同体はあくまでごく小規模なものである。

●テサロニケの信徒への手紙一、二（AD50～52 頃）

パウロは2回目の伝道の旅で、コリントス（コリント）からこの手紙を書いた。テサロニケにキリスト教を布教したのはパウロが最初であり、教会も設立した。この書簡は、テモテがマケドニアからコリントのパウロのもとへ戻った後で、テサロニケの教会の様子を知って書いたと考えられる（使徒 18:1～5、I テサ 3:6）。テモテの報告からパウロはテサロニケの教会が良い状態にあることを喜びつつも、自分の教えが間違っているとらえられていることにも気がついた。パウロはこの手紙によってそれらの誤りを正し、キリスト教徒たちを激励し聖なる者になることを神が望んでいると重ねて強調する。

第二の手紙（パウロの真正書簡であるかは議論がある）は、第一の手紙から時をおかずに（おそらくコリントで）書かれた（理由は、第一の手紙に書いたキリストの再臨について誤解している人々がいることを知ったパウロがその誤りを正すため）と考えられている。

●コリントの信徒への手紙一、二（AD52～58 頃）

コリントの信徒への手紙一、二は、パウロが 3 回目の伝道旅行の際にエフェソで書いたもので、コリントの信徒の疑問に答え、また彼らの中にあつた無秩序を正そうとしたものである。

第一の手紙はエフェソで書かれ、おそらくパウロのエフェソ滞在の三年目の五旬祭を前に書かれたものであると考えられている。このころ、パウロはマケドニアの信徒を訪ね、コリント（コリントス）へもまわろうとしていたと考えられる。協力者アポロやクロエの家の人々から、またステファナらが直接もたらした書簡によって、コリントの共同体がもめているという話をパウロは知らされた（当時のローマ帝国には一般市民が利用できる郵便配達システムはなく、手紙は旅行者によつてもたらされていた）。パウロがこの手紙を書いてコリントの共同体の人々に伝えたかったことは「信仰によつて一致してほしい」ということであつた。また、この書簡を利用してコリントの人々の疑問に答えている。この手紙はテトスとその兄弟によつてコリントへ運ばれたと考えられる（Ⅱコリ 8:16～18）。

第二の手紙は、フィリピカテサロニケで AD58 年の初頭に書かれたものとされている。この手紙をコリントへ届けたのはおそらくテトスで、第一の手紙との違いは、コリントの共同体のメンバーのみならず、アカエア州（古代ローマ期の属州、つまり本国以外の領土の一つでギリシア南部ペロポネソス半島に位置し、エピルスとマケドニア属州に北で接していた、※1 参照）の全域の共同体に宛てられた書簡であるということである。

●ローマの信徒への手紙（AD52～58 頃）

3 回目の伝道旅行の際、コリント（あるいは本書の筆記者テルティオがいるケンクレアイ：エーゲ海に面したコリントス至近の港）において書かれた。パウロがエルサレム教会のための募金を行い、「聖なるものたちに仕えるために」エルサレムを訪問しようとしていたころであると考えられる。パウロはローマの信徒たちのもとを訪れたいと望んでいたが、信徒たちをそれに備えさせるのがこの手紙の目的の一つであつた。またこの手紙は、キリスト教に改宗した一部のユダヤ人たちが疑いをもつて論じていた幾つかの教義について再確認している。

●フィリピの信徒への手紙、コロサイの信徒への手紙、エフェソの信徒への手紙、フィレモンへの手紙、ヘブライ人への手紙（AD60～62 頃）

パウロは、ローマでの最初の獄中生活のときにこれらの手紙を書いた。

フィリピの信徒への手紙は、パウロがフィリピの信徒たちに感謝と愛の気持ちを伝え、長期にわたる自分の投獄（ローマ皇帝護衛隊のもとに拘禁された囚人だったが、彼の周囲ではかなり大々的なクリスチャン活動がなされていた）のことで悲しむ彼らに慰めを与えるために書き送つたものである。

コロサイの信徒への手紙（パウロの真正書簡であるかは議論がある）は、コロサイの信徒たちが重

大な過ちに陥っているという報告を受けて書いたものである。彼らは、キリストのように人格を伸ばすことよりも、むしろ外形的な儀式に厳格に従うことによって完全になれると信じていた。ただフィリピ 2:5~11 の部分は後代の加筆と考えられているが、この部分は初代教会で用いられていた賛歌をパウロが引用したと説もある。

エフェソの信徒への手紙（パウロを擬して、パウロの死後書かれたとする見方が一般的である）は、キリストの教会に関するパウロの教えが書かれている。

フィレモンへの手紙は、ローマあるいはエフェソスにおいて獄中にあったパウロが、AD60 年に協力者フィレモンと二人の仲間（アフィアとアルキポ）にあてて記したものである。主人フィレモンの物を盗んでローマへ逃亡した奴隷オネシモ（ギリシア語で「役に立つ」の意。オネシモが主人のもとを逃亡し、逃亡生活の中でパウロに出会い、キリスト教徒になった。）についての個人的な手紙である。詳しい事情は文面から知りえないが、オネシモは一度「役に立たないもの」としてフィレモンのもとを離れたが、オネシモを赦すようにとの手紙を添えて、彼を主人のもとに送り返した。彼を再び迎え入れてほしいというのがパウロの願いである。

ヘブライ人への手紙（近代までパウロによるものとされていたが、匿名の手紙であり、後代の筆者によるものとする見方が支持されている）は、モーセの律法がキリストにあって成就し、キリストの福音の律法が与えられたことを、ユダヤ人教会員に理解させるために書いたものである。

● テモテへの手紙一、二、テトスへの手紙（AD62~65 頃）→パウロを擬して、パウロの死後書かれたとする見方が一般的である。

ローマでの最初の獄中生活から釈放された後に、これらの手紙を書いた。パウロはエフェソまで旅をして、様々な空論がはびこるのを食い止めるためにテモテをエフェソに残し、自分はまた戻って来るつもりでいた。パウロがテモテへの第一の手紙を書いたのは、マケドニアからと思われる。その目的は、テモテに義務を果たすよう勧め励ますことであつた。テトスへの手紙は、パウロが釈放期間中に書いたものである。この手紙は、義にかなった生活と教会内の規律について述べている。テモテへの第二の手紙は、2 度目の獄中生活の間、死期が迫っていることを意識しながら、殉教の直前に書いたものである。この手紙にはパウロの最後の言葉が書かれ、死に立ち向かう勇氣と信頼が示されている。

※ 1 : 属州(プロウインキア:provincia)



古代ローマが獲得したイタリア本国以外の領土を指す。元来、プロウインキアは政務官の権限、領域を指し、イタリア本土に限定されていたが、後に、海外属州を意味することになった。ローマの進出、騎士身分の台頭によって、その範囲は急激に拡大した。属州はローマの物資供給、兵士調達地であり、その有力者は皇帝礼拝団体などを通じて、ローマとの結びつきを求めた。